

野鳥たより

—北海道—

第58号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 昭和59年12月21日



シメ 札幌市街 撮影 白沢昌彦



もくじ

| | |
|--------------------|------------------|
| 探鳥地案内 (宮島沼) | 2 |
| 国定公園大沼・専菜沼の鳥 | 森口 和明... 3 |
| 北海道のオシドリ分布 | 藤巻 裕蔵... 7 |
| エゾヤマザクラとカラス | 斎藤新一郎... 8 |
| 探鳥会報告 | 福井・鶴川・張碓・鶴川... 9 |
| 探鳥会案内 | 12 |
| 鳥民だより | 12 |

探鳥地案内

宮島沼

(27)

◆位置 美唄市大富3区

◆交通 国鉄岩見沢駅下車。徒歩10分で中央バスターミナル、月形行に乗車、約35分で「大富」下車、徒歩で約1 km。又は、札沼線、月形駅下車、徒歩(バスもある)で月形大橋を渡り、約200m先の信号機の所を左折して右前方に見える沼。駅より約4 km。

◆概況 平坦な水田地帯の中にある大きな沼で、周囲約22km、面積32haの国有地である。鳥獣保護区ではない。沼の周辺には疎林が少しあるだけでどこからでも観察できる。ここは日本で越冬したマガンが集結し、沼周辺の水田で餌をとり体力をつけて北へ帰る日本での最後の集結地(約1万羽の集団になる)といわれている。

◆探鳥コース 沼の周囲には車の通れる路があり、どこからでも観察できる。沼が大きいので望遠鏡があれば便利。

◆見られる鳥 [多いもの] マガン(多いときで約1万羽)、オナガガモ、ヒドリガモ、キンクロハジロ、カルガモ、ハシビロガモ、スズガモ、マガモ、コガモ、オオハクチョウ、コハクチョウ(多いときで約300羽) [少ないもの] ヒシクイ、オオヒシクイ、ハクガン、シジュウカラガン、シマアジ、トモエガモ、カワアイサ、セイタカシギ、コアオアシシギ、オジロワシ、

オオワシ、アオサギ、オオジュリン、ノビタキ、モズ、ヒバリ、イソシギ、アオジ、カモメ、ウミネコ、ユリカモメ、アリスイ、カワラヒワ、ツグミ

◆その他 この沼のスターであるマガンは4月10日頃から飛来し始め、下旬には約1万羽、5月早々には渡ってしまう。日中、沼にマガンがいない時は

石狩湾の海上で休んだり、近くの水田で採餌しているから注意して探すよ。夕方には沼に帰ってくるのでその時刻に見るのもよい。空を覆うマガンの1万羽の群舞は圧巻である。この沼は鳥獣保護区ではないので、秋になるとハンターが入り、渡ってくるマガン、カモ類の観察は秋にはあまり期待できない。沼の周辺は風が強いので春には充分な防寒の用意が必要である。

田辺 至 〒072 美唄市西1条南5丁目



国定公園 大沼・蓴菜沼の鳥 森 口 和 明

大沼は渡島半島を代表する沼で、駒ヶ岳の南側山麓に位置し、狭い部分で大沼と小沼に分かれている。水深は浅く、深いところで10m余、小さい島が点在している。周囲にブナ、イタヤカエデなどの広葉樹、ヨシなどが自生し、本州の様相をしている。周遊道路がある。蓴菜沼は小沼の西方にあり、小沼より小さく、湖畔にヨシ、ブナなどの広葉樹に囲まれ、ジュンサイが広く湖面を覆っている。冬期間に小沼と大沼の宿野辺川河口との一部が凍結しないが、凍結順位は蓴菜沼、大沼、小沼で解氷順は、小沼、大沼、蓴菜沼となり水鳥の生息が変化する。

観察期間

大沼(大沼・小沼)は1972年1月から1984年10月まで11年10ヶ月。蓴菜沼は1974年10月から1984年10月までの10年間。(前記以前のは除外)

観察区域及び方法

大沼(大沼・小沼)は湖面全域と周遊道路周辺まで、水鳥とオジロワシ、オオワシを、観察点を取って、移動しながら観察し、陸鳥も単独または合せて観察した。蓴菜沼は水鳥を湖面の全域、陸鳥は道が短く一部のみ。

鳥相の概要

記録された大沼の鳥は'84年までに15目36科149種であった。'80年12月までには15目36目143種(コブハクチョウを除く)であったが実質5種が増加した。

種の増減は色々の要因があるが、カワセミ、アカショウビンが繁殖地を区域外に移動した。

水鳥の種が大沼を利用するのに一定の型がみられた。季節変動はオオハクチョウの越冬型、他のガンカモ科やハジロカイツブリなど春秋の二峰型、同じ二峰型でも春に多く秋に少いオナガガモなど、春に少く秋に多いハジロカイツブリなど、同じ越冬型でも異なった型をしているオオワシ・オジロワシなどがある。また種によってはほぼ一定の水域を利用するハジロカイツブリ、オオバンなどがあり、年変動では種によって急増や普通の増減がある。種数も増減するが、同じパターンを繰り返している。

渡りは以上を重ね合わせると、ガンカモ科の鳥は、秋は、ばらつきがあるが、春の渡りは変動が大きく、温度、

天候、日照時間、湖面の環境など一定の条件の期日に集中し、渡去をしており渡りの要因の一端を知ることが出来た。(1981年6月6日発表した一部を含む)繁殖鳥や繁殖の可能性のある種、その他少数残留する。

陸鳥は、特有の種は観察されなかったが、比較的多様な種がみられた。春の渡来時期に水鳥は、変動が3~4月が多いのに対し、陸鳥は、5~6月で種数が多く観察されている。秋は、種の固体数は増加するが、種数は大きな変動がなく、種により渡りの時期に差がみられた。

野鳥リストについて、観察年数が多いので細部をさげ月別とした。蓴菜沼は、1975年4月にコサギ2羽を観察した以外は、大沼にもみられ、種数も少ない。渡りや大沼との関係など興味ある問題もあるが省略。コブハクチョウは飼鳥であったので、別に調べていたが、今回記載した。科ごとの鳥について補足として若干記す。

アビ科・ウ科 ヒメウは希に、ウミウはやや定期に。サギ科 チュウサギは少数不定期に、アオサギはほぼ毎年飛来するが余り多くなく、年により差がある。

シギ、チドリ 量的に極く少く、イソシギのみ繁殖。カモメ科 ユリカモメ・アジサシが不定期に飛来するが他は更に不定期に飛来し、量的に多い場合がある。

アマツバメ・ツバメ科 アマツバメは出合が少い。ハタオリドリ科 スズメ、ニューナイスズメの繁殖地の接点がみられる。

おわりに

大沼は国定公園に指定され、豊かな自然に恵まれ、その上鳥獣保護区に指定されており、楽園と言ってもよい環境にある。しかし沼は人間によって左右される状態にある。小沼は水量の調整によって冬期の完全凍結を防ぎ水鳥が越冬している。反面に鳥の異常変化によって、環境の変化を、鳥の異常行動により原因を知る事が出来たが、その原因の多くは人為的なものであり、徐々に、環境が変化しており特に繁殖地にみられている。従って鳥相も変化するものと思われます。学ぶことの出来る自然をいつまでも残したいものです。

国定公園大沼の野鳥リスト (1972. 1 ~ 1984. 10)

Bは繁殖

| 科 | 種 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 備 | 考 |
|---|----------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|----|----|----|---|---|
| ア | ビ | | | | | | | | | | | | | 希 | |
| | オオハム | | | | | | | | | | | | | 希 | |
| | シロエリオオハム | | | | | | | | | | | | | | |
| カ | イツブリ | | | | | | | | | | | | | B | |

| 科 | 種 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 備考 |
|-------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|----|----|----|---|
| カイツブリ | ハジロカイツブリ ミミカイツブリ アカエリカイツブリ カンムリカイツブリ | | | | | | | | | | | | | |
| ウ | カウ ワウ ミウ | | | | | | | | | | | | | 希 |
| サギ | アマサギ チユウサギ アオサギ | | | | | | | | | | | | | '73.5 |
| ガンカモ | マヒオコオマカコトヨオヒアオシハホキシクシコホミウカ ガクチヨウドガ シハクチヨウドガ オハクチヨウドガ ルガ モエガ シヨシガ カヨシガ ドリカヒドリガ メナガ シマア ハシビロガ シンクハハジ ズガ ロガ ノリガ オジロガ ホコミア ワア イイ イイ | | | | | | | | | | | | | B B B '79.3 '72.12 '73.11 '83.10 希 希 '83.11 |
| ワシタカ | トオオツハケノクチ ジロオ ワフタ イイ アシノ スマ タウ | | | | | | | | | | | | | B '72.12 '77.12 |
| ハヤブサ | ハチゴウ ヤハチ ブヤブ サヤブ サヤブ | | | | | | | | | | | | | |
| キジ | キ | | | | | | | | | | | | | B |
| クイナ | バオ オオ バン | | | | | | | | | | | | | B |
| チドリ | コイシ チカル ドリ チドリ | | | | | | | | | | | | | |

| 科 | 種 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|----|----|----|------------------|
| シ | ギ ツルシギ アオアシギ クサシギ キアシギ イソシギ オグロシギ オオジシ | | | | | | | | | | | | | B B |
| カ | モ ユリカモメ セグロカモメ オオシロカモメ ウカアジ | | | | | | | | | | | | | 1980.10 |
| ハ | ト キアバト | | | | | | | | | | | | | B |
| ホ | トギ カッコウ ツツド | | | | | | | | | | | | | B B 区外に移動 希 |
| ア | マツバ ハリオアマツバ アマツバ | | | | | | | | | | | | | |
| カ | ワセ ヤマセ アカワセ | | | | | | | | | | | | | B |
| キ | ツツ ヤクマ アカオ ココ | | | | | | | | | | | | | B B B B |
| ヒ | バリ ヒバ | | | | | | | | | | | | | B |
| ツ | バ ツイ | | | | | | | | | | | | | B |
| セ | キ ハセ | | | | | | | | | | | | | B |
| ヒ | ヨ ヒヨ | | | | | | | | | | | | | |
| モ | ズ チモア ゴカモ | | | | | | | | | | | | | B 希 希 |
| レ | ン キレン ヒレン | | | | | | | | | | | | | |
| カ | ワ カワ | | | | | | | | | | | | | |
| ミ | ソ ミソ | | | | | | | | | | | | | |
| ヒ | タ コマ コジョ ノ | | | | | | | | | | | | | 希 B |

| 科 | 種 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 備考 |
|-------------|-------------------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|----|----|----|---|
| ヒ タ キ | ク ア ツ ウ | | | | | | | | | | | | | B B B B B B B B B B B |
| | ロ カ グ | | | | | | | | | | | | | |
| | ツ ハ イ | | | | | | | | | | | | | |
| | グ イ | | | | | | | | | | | | | |
| | コ ヨ シ キ | | | | | | | | | | | | | |
| | オ オ ヨ シ キ | | | | | | | | | | | | | |
| | エ ズ ム シ ク | | | | | | | | | | | | | |
| | セ ン ダ イ ム シ ク | | | | | | | | | | | | | |
| | キ ク イ タ グ | | | | | | | | | | | | | |
| | キ ビ タ | | | | | | | | | | | | | |
| | オ オ ビ タ | | | | | | | | | | | | | |
| | サ メ ビ タ | | | | | | | | | | | | | |
| エ コ サ メ ビ タ | | | | | | | | | | | | | | |
| エ ナ ガ | エ ナ ガ | | | | | | | | | | | | | |
| シジュウカラ | ハ シ プ ト ガ | | | | | | | | | | | | | B |
| | コ ガ | | | | | | | | | | | | | |
| | ヒ ガ | | | | | | | | | | | | | |
| | ヤ マ ガ | | | | | | | | | | | | | |
| シ ジ ユ ウ カ ラ | | | | | | | | | | | | | | |
| ゴジュウカラ | ゴジュウカラ | | | | | | | | | | | | B | |
| キバシリ | キバシリ | | | | | | | | | | | | | 希 |
| メジロ | メジロ | | | | | | | | | | | | | |
| ホオジロ | ホ オ ジ ロ | | | | | | | | | | | | | B B B 希 |
| | ホ オ ジ ロ | | | | | | | | | | | | | |
| | ホ カ シ オ | | | | | | | | | | | | | |
| | ホ カ シ オ | | | | | | | | | | | | | |
| アトリ | ア ト リ | | | | | | | | | | | | | B B B B B B |
| | ア カ マ ベ イ ベ ウ イ シ | | | | | | | | | | | | | |
| | ア カ マ ベ イ | | | | | | | | | | | | | |
| | ア カ マ | | | | | | | | | | | | | |
| | ア カ | | | | | | | | | | | | | |
| | ア | | | | | | | | | | | | | |
| ハタオリドリ | ニ ュ ウ ナ イ ス | | | | | | | | | | | | | B B |
| | ス ズ メ | | | | | | | | | | | | | |
| ムクドリ | コ ム ク ド リ | | | | | | | | | | | | | B B |
| | ム ク ド | | | | | | | | | | | | | |
| カラス | カ ケ ス | | | | | | | | | | | | | B B |
| | ハ シ プ ト ガ | | | | | | | | | | | | | |
| | ハ シ ボ ソ ガ | | | | | | | | | | | | | |

〒040 函館市新川町6-4

北海道のオシドリ分布(中間報告1) 藤 卷 裕 蔵

オシドリは古くからよく知られている鳥で、「おしどり夫婦」といった言葉があるほどであるが、この鳥の分布や生息数など現状についてはあまり良く知られていない。北海道の各地で行われている鳥類調査の結果をみても、オシドリが記録されている場合は少ない。そこで会員の皆さんの協力を得て分布について明らかにしようと、本誌に観察記録をお送り下さるようお願いを掲載していただいた。これまでに数名の方から貴重な記録をお送りいただいている。これ以外にも二、三の方からいただいた記録や鳥類調査の報告に観察例がある。これらの資料にもとづいて、第1回目のまとめを行ってみた。

なお、これまでに観察記録をお送り下さった方は次のとおりである(順不同)。二村一男、百武 充、小林清勇、佐藤理夫、長岡宏幸、梅本正照、黒沢信道、飯嶋良朗、中村高士、長谷川 卓、福岡正樹

1978年に第2回自然環境保全基礎調査の動物分布調査の一環として、鳥類の繁殖調査が行われ、257種の鳥類の繁殖分布図がつくられた。オシドリの分布図もこれに含まれているが、これを見るとまだまだ完全な分布を示しているとは思えない。これに今回得られた記録や文献からの記録を追加して新たに北海道におけるオシドリの分布図をつくってみた(図1)

1/5万の地形図に相当する広さを1区画とすると、北海道は270区画となる。1978年の調査ではこのうち32か所で生息が記録され、さらにそのうち6か所で繁殖が確認された。追加の記録を加えると、繁殖期に生息が記録されたのは、54か所とだいぶ増え、繁殖が確認されたのは10か所となった。

オシドリは北海道では夏鳥である。初認日は道東の十勝や釧路では4月16日(1979)～30日(1971)、中部(空地)では4月3日(1983)である。他の地域については、いまのところ私の手元には資料がない。終認日については、さらに記録は少ない。十勝では10月中旬、石狩では10月13日(1980)が遅い記録で、湖沼が凍結する前には北海道を去るようである。

渡来しはじめの頃には、つかいまたは小群が平野部の湖沼、都市や農耕地を流れる川でもみられるが、5～10月には主に山間部の川や湖(ダム湖も含む)に生息している。このような環境では、小さなひなの存在で繁殖が確認されている。繁殖はこの他にも野幌や利根別のよう

に平野部の森林中にある池でも確認されている。一方、大きな川の下流部や海岸に近い湖沼に生息することはあまりない。これまで十勝川下流部、釧路川下流部、海岸に近い湧洞沼、生花苗沼やウトナイ沼ではかなりよく調査されているのに、オシドリは記録されていない。しかしこのような環境にはまったく出現しないわけではなく、これまでに石狩川河口、涛沸湖、網走湖でも観察された記録がある。

繁殖期ははっきりしないが、ひなをつれた雌が観察されるのは主に6月上旬～7月中旬であるが、8月上旬に家族群が見られたこともある。1羽の雌がつれているひなの数は3～11羽である。

第1回目の中間報告としてのまとめは以上のとおりである。分布図を見ると、桧山、胆振、日高、留萌、上川北部、網走、釧路、根室の各地方に空白の区画がまだ多い。今後も資料を集め、より充実した分布図を紹介したいと思う。

会員の皆さんからの観察記録をお待ちしています。

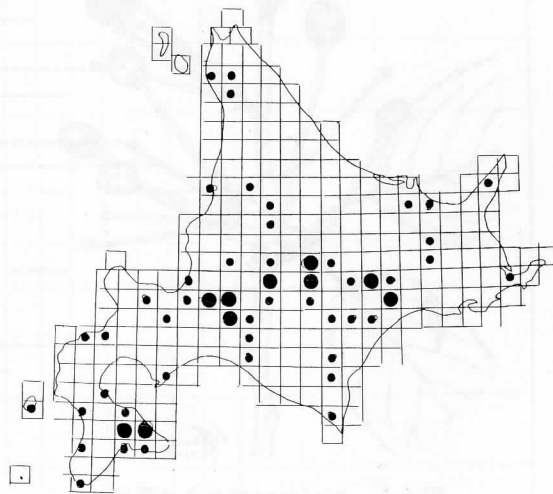


図1、北海道におけるオシドリの分布。大きな●：繁殖確認、小さな●：生息確認、繁殖未確認
〒080帯広市稲田町西2線13

エゾヤマザクラとカラス

齋藤新一郎

サクランボ狩りの季節になった。いま、桜の実の熟する時である。

勤務先の道立林業試験場の構内には、小川沿いに桜が植栽されている。青葉騒の樹冠には、近づくと、黒光りする桜の実が無数に点滅していて、巣立ち鳥もまじえたムクドリの一団が、にぎやかに食事中である。

エゾヤマザクラの多肉果は、野生の桜の実（果実）としては、なかなか大きい。一枝を手折り、スケッチをした。すでに、半分くらいの果柄は、実なしの、ただの棒になっていた（図-1）。

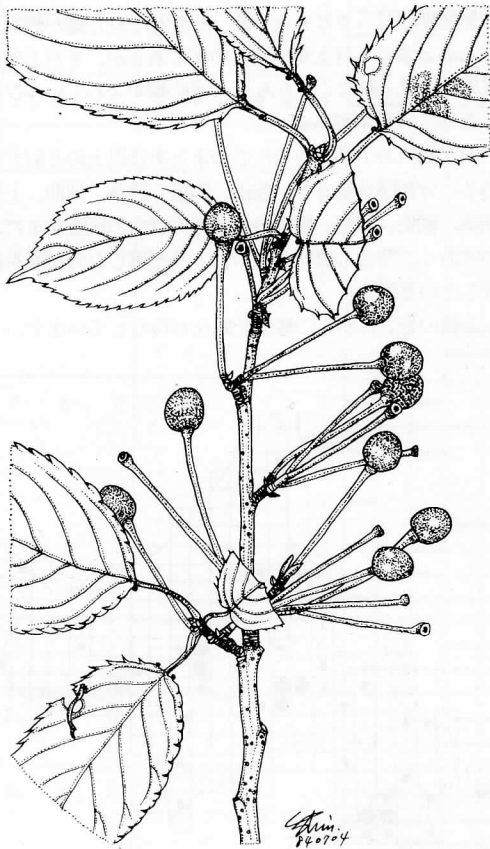


図-1 エゾヤマザクラの果柄

スケッチしていて、先日の桜のたね（核果）を思い出した。旭川市郊外の、旭山スキー場のリフトの黒い板敷きに、白い糞と桃いろの核果とが点在していた。核果は数個〜十数個が一塊となっていて、皮（外果皮）が接着剤の役割を演じていた。場所を考えると、ここでペリッ

トを吐出した鳥は、カラスなのであろう。ハシボソか、ハシブトかはわからないけれども（図-2）。

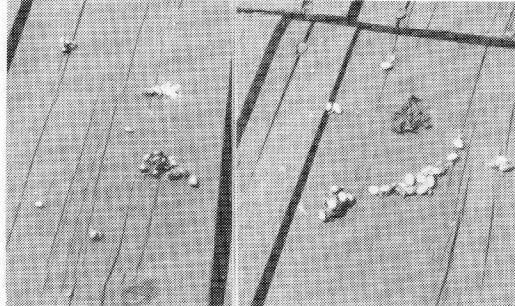


図-2 ペリットとして吐出された核果
旭山スキー場（浅井定美氏による、
1984. 6. 27）

エゾヤマザクラの果実の構造は、サクラ属であるから、ウメ、モモ、サクランボ（セイヨウミザクラ）と同様であって、外から内へ皮、果肉（中果皮）、核（殻、内果皮）の順に並んでいる。カラスは、果肉だけを消化し、不消化物を吐出したのである（図-3）。

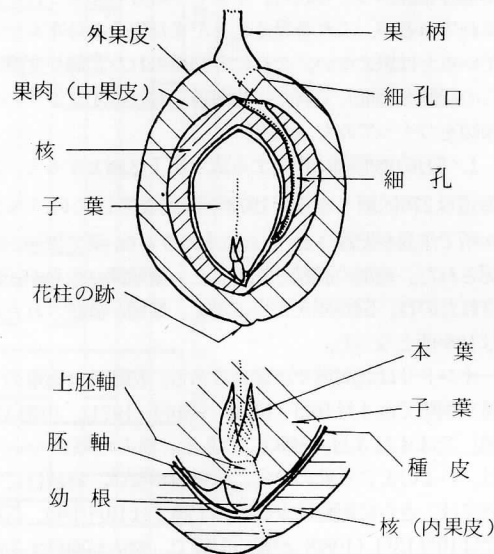


図-3 エゾヤマザクラの核果の縦断面

ところが、この核が堅く丈夫なために、核の内側の種子（仁）が健全なまま、親木から遠くへ運ばれることになる。青葉の中の黒光り果実は、鳥へのディスプレイ効果をもち、おいしい果肉を運賃として、たね散布をして

もらう、ということである。

この消化管経由の(被食型の)たね散布は、食べられた後に、種子がすべて散布される、という理想の散布方式とみられる。だが、このたね散布方式にも、大きな弱点がある。それは、地面の上に、しかも、この季節に、核つき種子がまかれるのであって、来春の発芽期までに地中に埋められる保証がない、ということである。

ふつう、たねまきは、土かけ(覆土)をとともうものでこのことは畑でも、苗床でも同様である。種子は地中に埋められてはじめて、発芽条件が十分となる、とみら

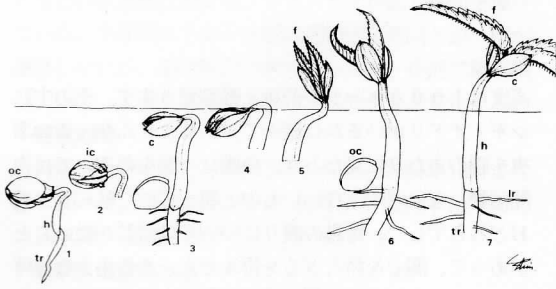


図-4 エゾヤマザクラの発芽

oc: 核(種殻,内果皮), ic: 種皮(薄皮),
h: 胚軸, tr: 主根, lr: 側根, c: 子葉,
f: ふつう葉(本葉)

れる。偶然に、落葉の下とか、石の下にでも置かれれば発芽しやすいのであろうか。

エゾヤマザクラの発芽をみると、双葉(子葉)が地上に現われるときに、ふつうの双子葉植物と違って、地上に鎌首を持上げる際には抵抗の大きい殻を、地中に残すようになったのだろうか(図-4)。

ウメ、モモのような大きなたね(核つき種子)では、子葉も地中にとどまる、地下子葉性の発芽をする。ミズナラ(どんぐり)、オニグルミの発芽も、地下子葉性である。これらは、動物散布といっても、地下貯蔵タイプの(貯食型の)たね散布とみられる。

発芽様式でみる限り、エゾヤマザクラは、地上子葉性から地下子葉性への移行相にある、といえそうである。だとすると、カラスに運ばれ、あるいはムクドリに運ばれたたねは、もう一度、貯食型の動物に運ばれ、地中に浅く埋められる必要があるのかもしれない。それは、エゾアカネズミ、ヒメネズミの類なのであろうか。

ペリットのたねも、スケッチした後に果肉を取除いたたねも、ともにすぐに苗畑にまいた。とりまき——これは自然と同じ季節のたねまきである。この季節にまかれたたねは、来春そろって、高い率で発芽すること疑いなしである。(1984.7.4)

079-01北海道美幌市光珠内町東山北海道林業試験場



福 移

59.7.8 山口弘道(高校生)

7月8日の早朝、僕にとって初めての地、福移に向けて自転車をこいだ。家を出た頃は晴れていたが、東区内に入る頃になると空は雲に覆われてきて、雨具を持ってこなかった僕は多少不安になった。やがて集合場所である福移入り口バス停に着いた。ところが既に集合時間寸前だというのに辺りには全く人影がなく不安は一層増した。バスが来て誰も降りてこなかった。集合場所を間違えたのだろうかと思い、他のバス停を探したりしたが誰もいなかった。仕方がないのであきらめて、石狩川堤防で鳥を見ながらゆっくり自転車をこいだ。しばらくそうして中沼基地付近にさしかかった時、遠くに探鳥会らしき人々が見えた。もう始まっている様子らしく、ほっとして急いで会に加わった。その頃には天気もよくなり、先ほどの不安もどこかへ行ってしまった。

草原での探鳥会は始めてだったので、今まで見たことのない鳥もたくさん見られ満足だった。草原の鳥と

いうと僕は地味な鳥というイメージを抱いていたが、実際に見てみるとなかなかきれいな鳥も多く、森林の鳥とはまた違った良さがあった。少しずつでも草原の鳥の名前を覚えていき、一目見ただけで名前を言えるようになっていたいと思う。

遠くに見えた20~30羽程のアオサギの群れは印象的だった。いつかはもう少し近くでじっくり見たいと思う。また、上空から絶えず聞こえていたヒバリの声は暑さを忘れさせてくれた。

150万都市の札幌にこのような草原があるということは、非常に大切なことだと思う。ところがこの近くにも宅地化の波が押し寄せ、静かな農村地帯から近郊住宅街に変わる時もそんなに遠いことではないかもしれない。そうすると河原は整備され鳥も住みつかなくなってしまおうだろう。そのような事態に決してなることのないようにこの貴重な自然を守っていかなければならないと思う。

〔記録された鳥〕 アオサギ、トビ、チュウヒ、ウズラ、イソシギ、オオジシギ、ウミネコ、キジバト、カッコウ、ヒバリ、ショウドウツバメ、イワツバメ、ハクセキレイ、

モズ、アカモズ、ノゴマ、ノビタキ、エゾセンニュウ、シマセンニュウ、コヨシキリ、ホオジロ、ホオアカ、シマアオジ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、ベニマシコ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ドバト、以上31種

〔参加者〕 安倍泰子、武沢和義、井上公雄、戸津高保、鈴木 祝、白沢昌彦・光明、羽田恭子、道川 弘・富美

子、泉屋宣志・恵津子、屋代育夫、野々村 菊、横田通典、清水 幸、園部恭一、柳沢信雄・千代子、富川 徹、山口弘道、堀内 進、矢口兼江、曾根モト、野口正男、国本昌秀、大坊幸七、菅原、長谷川涼子、以上29名

〔担当幹事〕 富川 徹、長谷川涼子

〒061-21 札幌市南区南32条西9丁目グランドハイ
ツ306

鵓 川

たまたま野幌森林公園で野鳥愛護会の方々に出会い、その場で仲間入りをさせて貰ってもう4年になりました。そしてその年の9月に鵓川の探鳥会に参加して、鵓川河口が、シギ、チドリの渡来地として有名なことを知りました。これまで主に野幌森林公園で鳥を観ていた私にとって、シギ・チドリは、似通った色・形のものが多く、それに冬羽であったり、鳴き声も顕著でない等、これは難物と思ったものです。まずはこの難物さが、この探鳥会の魅力にもなりました。

鵓川に着いて、皆さんと共にあの牧場のバラ線のある入口に立ったとき、大きな期待と不安が横切ります。

はるばる出かけて行ったが、シギ1羽に終わることもあったからです。しかし、今回は天候にも恵まれ、シギ・チドリ類13種を含めて34種も確認でき、楽しい探鳥会となりました。

鵓川河口のように片や限らない広さの太平洋を控え、間もなく南方へ飛び立つと思われる彼らは、休んでいるもの、餌を求めて走り回っている等、渡りのための準備をしているように想像でき、森林や草原の鳥以上に旅鳥渡り鳥であるとの実感が得られます。どのようなコースを辿って渡るのかは知る由もないが、なかには、大海を千キロメートル以上も一気に飛ぶものがあるようです。

彼らはいつここに着き、いつ立つのでしょうか。日が暮れてから渡りをする小鳥がたくさんいることは、これまでよく感知しています。それは渡りの時季で、しかも移動性高気圧に覆われた、よく晴れた夜で、殆んど無風状態のときです。月が出ていると望遠鏡で確認できますが、

59.8.26 浪 田 良 三

高度は1000メートル前後と推定できます。その中にシギ・チドリがいるかは確かではありませんが、この事実を眼のあたりに見たとき、鳥類は一部をのぞいては夜間活動しない（できない）ものと思っていた私にとっておどろきでした。野鳥の渡りについては信じがたいことがあって、関心を持たざるを得ません。あの小さな身体のどこにエネルギーを持っているのか、またジェットエンジンでもないのにその持続性が、今回まだ夏羽が残っており、換羽中と思えるムナグロがいたが、換羽完了しないと、エネルギーが貯えられず、長距離の旅はできないだろうと、勝手な想像をしながら、鵓川を離れたものでした。

〔記録された鳥〕 アオサギ、カルガモ、コガモ、トビ、チュウヒ、チゴハヤブサ、コチドリ、シロチドリ、メダイチドリ、ムナグロ、ダイゼン、トウネン、オバシギ、キリアイ、アオアシシギ、イソシギ、ソリハシシギ、オグロシギ、タシギ、アカエリヒレアシシギ、ユリカモメ、ウミネコ、アジサシ、キジバト、カワセミ、ヒバリ、ショウドウツバメ、ハクセキレイ、ノビタキ、ホオアカ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上35種

〔参加者〕 萩 千賀、羽田恭子、関口健一、浪田良三、屋代育夫、霜村耕一・佳代子、戸津高保・以知子、青木二郎、長谷川涼子、小堀煌治、紅林雅文・幸子、平川悠子、堀内 進、道川 弘・富美子 以上18名

〔担当幹事〕 羽田恭子、屋代育夫、道川富美子

〒069-01 江別市大麻沢町10-14

張 碓

土曜日午後から、雨空を気にしながら仕事帰り探鳥会に参加しました。

59.9.1 松 山 佳 則

少し遅れて行くと、海岸に下る坂の中腹で望遠鏡を覗いているところでした。双眼鏡で覗いて見ると、向い側

の灌木林に10羽位と、遠くの高い木に20羽位のアオバトが休んでいるのが見えた。しかしジッと身動きせず止っており海岸の岩礁に降りる気配は全く感じられない。

気が付いて見ると、いつも海水を飲み降りる岩礁は今度は数十羽のウミウやオオセグロカモメ等に占拠されていた。(海水浴期間はいつも人間が占領していた)

海岸寄りの岸壁では、美しい姿のイソヒヨドリが飛び交っていた。

待つ事小1時間、3時10分位前、アオバトが1羽2羽と飛来しはじめた。すると次から次と数を増し約100羽程が上空を旋回しながら、群れを替え数を変えて占拠されている岩礁に向かって着礁を試みますが降りることができません。その内、近くの小さな岩礁に降り海水を飲みはじめました。1回に十数羽位ずつ降り海水を飲み終ると直ぐ飛び立って行きます。その状態が約15分間、何回も繰返し、海水を飲み終って飛び去って行きました。

運が良ければ、ハヤブサのアオバト捕捉シーンが見られるのではと期待しておりましたが残念ながら今回はハヤブサの姿は見られませんでした。

帰りに地元の漁師から鳥の話しを聞いているうちに雨が降り出しバスに乗る頃には土砂降りになっていた。

今回の探鳥会では鳥の種類は僅かでしたがそれでもアオバトの大群を見ることができ気分よく帰路につきました。

〔記録された鳥〕 ウミウ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、ウミネコ、アオバト、ハクセキレイ、イソヒヨドリ、ハシブトガラス、以上8種

〔参加者〕 青木二郎、羽田恭子、早瀬広司、松山佳則、浪田良三、大坊幸七、清水朋子・亜樹子、曾根モト、戸津高保・以知子、大和民承

〔担当幹事〕 早瀬広司

〒047 小樽市幸 2の10の24

鵜 川 59.9.16 室蘭市立 水元小学校6年2組 福岡 正樹

ヤッター明日は鵜川だ。これで今年は4回目、でもお父さんは6回目すごいな「明日は晴れるぞ」と自分にいい聞かせてねた。次の朝起きてみると、青空だった。ぼくとお父さんとお母さんで7時に家を出た。お父さんが今日は3つぐらいふえるぞ、と言ったのでわくわくしていた。駅でシギ、チのぼくの先生の鈴木さんを乗せて出発だ。鵜川駅につくとどこかで見えた人がいる。去年の夏函館の探鳥会でお世話になった吉田さんたちだった。

しばらく話をしていると列車がついた。長谷川さんたちが降りてきた。やっと出発だ。鵜川牧場につくと羽田さんと、萩さん達が先についていた。羽田さんが入り口でキアシシギがいると言ったので早く見たいと思ってわくわくしながら羽田さんのあとについていった。さっそくフィールドノートに記録しようとしたとき、羽田さんが、ちょっと近くに行ってみてきますと言って歩き出したので、ぼくとお父さんはあわててついて行った。羽田さんが、10メートルくらいまで、ゆっくりと近づいて観察してからもどって来た。コオバシギだと教えてもらった。初めての鳥なので、すごくびっくりした。それから牧場を横切って、川に出ると、そこにはダイゼン、メダイチドリ、エリマキシギ、アオアシシギ、ハマシギ、オグロシギ、ムナグロ、トウネンなどたくさんいました。ぼくは、オグロシギも初めてだった。ダイゼンがピューイーと鳴いていた。ムナグロも高い声で鳴いていた。羽田さんに教えてもらって、初めてわかった。河口について、お父さんに聞いていたヒバリシギが見れなくて、

残念だった。それからみんなでお弁当を食べた。探鳥のお弁当はすごくおいしい。ついついおにぎりを3つも食べてしまう。帰りの牧場で、メダイチドリ、片足のないダイゼン、ムナグロ、エリマキシギ、萩さんが「陽の光りぐあいがいい」と言って、写真をとっていたら、横から、ヒバリみたいなタヒバリのようでムネアカタヒバリのような「珍鳥」が出てきた。逆光で、見づらいせいもあって、みんなやんでいた。図鑑と見比べてうなっていた。名前がわかったら教えてください。今日の鵜川は、秋晴れて風もなく、今まで10回以上も行ったが一番良い日でした。森の鳥も草原の鳥も海の鳥もいいけれど、やっぱり、今日鵜川に来て、シギ、チが益々、好きになりました。今度、また参加しますので、色々教えてください。よろしくお願いします。

〔記録された鳥〕 アオサギ、カルガモ、コガモ、トビ、チュウヒ、ハヤブサ、メダイチドリ、ムナグロ、ダイゼン、トウネン、ハマシギ、コオバシギ、エリマキシギ、アオアシシギ、オグロシギ、ウミネコ、アジサシ、キジバト、ヒバリ、ハクセキレイ、モズ、ノビタキ、ムクドリ、ハシボソガラス、以上24種

〔参加者〕 松村 宏、石谷義一、鈴木慶子、吉田省三、上平安子、福岡研也・玲子・正樹、井上公雄、柳沢信雄・千代子、岩泉ゆう子、堀内 進、谷口一芳・登志、曾根モト、羽田恭子、萩 千賀、長谷川涼子、以上19名

〔担当幹事〕 萩 千賀、堀内 進、長谷川涼子

〒050 登別市美園町6丁目14-10



〔野幌森林公園〕 昭和60年2月24日(日)、午前9時、国鉄大麻駅待合室集合。歩行に適したスキーが要ります。〔円山公園〕 昭和60年3月3日(日) 午前10時、円山公園管理事務所前集合(午前中解散予定)
〔ウトナイ湖〕 昭和60年3月31日(日) 午前10時、ウトナイ、レイクホテル湖畔側集合。
〔野幌森林公園〕 昭和60年4月21日(日)、28日(日)

午前9時30分大沢駐車場入口または百年記念塔前8時30分集合。

〔野幌森林公園を歩きましょう〕

昭和60年4月14日(日) 午前9時30分大沢駐車場入口集合。

いずれの探鳥会も、ひどい暴風雪でないかぎり行きます。昼食、筆記用具、観察用具をご用意下さい。

探鳥会のお問い合わせは、長谷川011-865-1735まで。



◆定例幹事会報告

59年10月3日(水) 18時45分～20時15分
市民会館会議室 出席幹事8名
〔審議内容〕

1. 国会図書館逐次刊行物より、国際標準逐次刊行物番号の割り当て通知があり、折り返しバックナンバー36～55号発送の報告がありました。
2. 野鳥だより57号に、会員名簿と新しい入会案内用のハガキを同封する事になり、発送の準備が整った旨、報告がありました。
3. 絵ハガキの作成について具体的討議が行われました。12枚組とし、鳥種はほぼ決定しました。説明文の執筆者及び標準和名・学名・英名を、どの程度まで入れるかは、次回の幹事会で決める事になりました。

◆定例幹事会報告

59年11月7日(水) 18時30分～21時
札幌市民会館会議室 出席幹事12名
〔審議内容〕

1. 第57号及び会員名簿の発送について報告があった。
2. 新年懇談会における依頼講師について複数の候補氏名報告があった。
3. 日本野鳥の会の高野伸二氏の逝去に伴う弔電について報告があった。
4. 58号の編集会議について報告があった。
5. 来年度の探鳥予定について説明があった。
6. 絵ハガキの作成について細部検討を行なった。

◆新年懇談会の開催について

新年懇談会を次のとおり開催いたしますので、ふるってご参加下さい。

今回は東京におられる財団法人日本鳥類保護連盟の

柳沢紀夫さんを講師にお招きし、野鳥のお話をさせていただくことになっておりますので、非常に参考になると思います。また、例年どおり、会員の皆さんのスライドもあわせて鑑賞いたしたいと思っておりますので、どうぞふるってご持参ください。

日時 昭和60年1月26日(土) 午後2時～

場所 北海道婦人文化会館(札幌市中央区北1条西7丁目)

会費 500円程度を予定しております。

◆北海道野鳥愛護会の野鳥絵葉書が完成

「珍しい鳥」の絵葉書の作製については、本誌第56号で会員の皆さんに協力方をお願いしていたところですが、ネガの提供、予算の運用等も順調に進みこのたび、完成の運びとなりました。

今回作製したのは珍鳥ばかりで、本道で初めて確認されたソデグロツルの写真をはじめノドグロツグミ、セイタカシキ、シロフクロウなど12種を集めており、タイトルは「北海道の珍鳥」で定価は400円です。

会員の皆さんには1セットずつ送付しますので、どうぞご利用ください。

なお、会員にはこの絵葉書を会員特別価格で販売いたしますが、購入方法等の詳細については、別途お知らせしますので、しばらくお待ち願います。

◆1月「藤の沢」探鳥会について

野外での観察も行う予定ですのでスキーかかんじきの用意もして下さい。

◆おわびと訂正

本紙57号の記載事項の中で誤りがありましたので、おわびして訂正致します。P3右欄下から4行目「54年5月営巣」→84年5月営巣、同3行目「78、79年緑丘で」→「83、84年緑丘で」、同1行目「79年5月26日」→「84年5月26日」

〔北海道野鳥愛護会〕年会費 1,500円(会計年度4月より) 郵便振替 小樽 1-18287
☎ 060 札幌市中央区北1条西7丁目 広井ビル5階 北海道自然保護協会気付 ☎ (011) 251-5465